
夢と現実の境界線 春野天使編

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢と現実の境界線 春野天使編

【Nコード】

N4878B

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

毎晩彼女の夢を見る。萩原さより、モデルをやってる美少女。いつも決まって同じ夢。夢の中の彼女は僕に向かって何か言ってるんだけど、何を言ってるのかは分からない。潤んだ瞳でじっと僕を見つめている……。

(前書き)

大変遅くなりましたが^^;、「企画小説」グループ小説の第八弾です。「グループ小説」で検索をかけると、他の作家さん達の素敵な作品を読むことができます。

彼女が駆けてくる。ストレートの艶やかな黒髪を、微風になびかせて……。

春の日だまりのような、柔らかい笑みを浮かべる、まだあどけない少女の君。長いまつげの下の潤んだ瞳で、じっと僕を見つめる。僕だけのスクリーンの中で、彼女の顔が間近に迫る。

彼女は瞳を潤ませ、僕に向かって何か言っている。ふつくらとしたピンク色の唇だけが動いて、何と言っているのかは分からない。何て言ってるんだらう？

……笠井^{かさい}……。

どこからか、耳障りな声が聞こえてくる。小さいが、低くて野太い声。

笠井、笠井！

段々と声は大きくなり、僕の心地よい眠りの邪魔をする。眠り？

僕は眠っているのか？ これは夢？ また、あの夢？……。

「笠井清隆！」

強烈な罵声で、僕の眠りは一気に覚めた。気がつく、口の端からズルツとヨダレが垂れていた。

「は、はい？……」

寝ぼけ眼で僕は体を起こす。禿げたオヤジ、いや担任の沢田と目があった。今は授業中だった。僕の間抜け面と沢田の怒りで真っ赤になった顔に、クラス中が爆笑する。

「廊下に立つとれーっ！」

沢田が声を裏返らせて怒鳴る。今時、廊下に立たせるような罰を言いつけるのは、沢田くらいだ。前の席で親友の悟史^{さとし}が、憐れむような笑いをこらえるような顔をして僕を見ている。

ま、いいか。廊下に出れば眠気も覚める。ちよっと寒いけどな。

立春を過ぎ、ぼかぼか陽気の窓際で居眠りしていた後だけに、寒さが堪えるかも。

それにしても、またあの夢を見た。クラスメイトの萩原はぎわらさよりの夢。

「けど、担任の目の前でよくあんなにグーグー眠れるよなあ」

昼休みの教室で、悟史は笑いながら僕に言う。

「ほんと、幸せそうな顔して眠ってたぜ。お前にも見せてやりたかった。よっぽど良い夢見てたんだろうな」

そりゃそうさ……あの萩原さよりの夢だもの。僕はチラリと斜め前のさよりの机を見る。彼女は今日も休んでいた。

「何々？ さよりの机なんかじーっと見て。まさか、夢にさよりが出てきたとか？」

悟史はからかいながら、僕を見てニツと笑う。

そのまさか。最初の頃は僕も嬉しかった。なんてったって、クラスメイトの萩原さよりは十四才にして売れっ子モデル。ハツとするほどの美少女で、思わず生唾を飲み込むほどのスタイルの良さ。担任の沢田だって、さよりの前ではメロメロ。エロおやじと化している。

けどねえ、こうしょっちゅう夢に出てこられると、落ち着かないんですけど。

ここ一週間、僕は毎晩さよりの夢を見ている。夜だけじゃなく、ちよつとうたた寝した時もだ。

「そう、さよりの夢……」

僕はフーと息を吐いて、肩を落とした。

「マジかよ！ すげえな！」

僕の気持ちとは裏腹に、悟史は楽しそうだ。

「で、どんな夢？ さよりどんな格好してた？ お前等二人で何してたんだよー！」

悟史は頭の中で妄想を膨らましている。

「二人じゃない。出てくるのはさよりだけだから」

僕は冷静に答える。

「白っぽいふわふわした服かな？ 服はよくわかんない。すぐにアップになつて顔しか見えなくなるから」

「アップって？ なんかやけに詳しいな」

「今日で七回目だもん、さよりの夢。しかも、いつも同じパターン」

「はあ？……」

悟史は不思議そうな顔して僕をじつと見る。

「何だよ……確かにさより美人だけど、僕のタイプじゃないんだけど」

「おおーっ！ お前クラス中、いや学校中、いや日本中の男子敵に回したな。さよりってブレイク寸前なんだぜ。今度新しいCM撮つたつて聞いたし」

「へえ、そう」

出来るだけ平静を装って、そっけなく答える。

「なんか、つまんねえ奴。けど、もしかして」

悟史は僕をチラツと見て、腕組みする。

「何？」

「絶対ありえねえみたいな話だけど……もしかすると、さよりがお前に気があるのかもな」「え？……」

「どっかで聞いたことあるんだ。夢の中に現れた異性は、好意をもっているから夢に出てくるんだつて。つまり、お前の夢にさよりが出てくるのは、さよりがお前を好きだからだよ」

「は？……普通「反対」じゃないの？」

ずっと相手を心に思っているから、夢に出てくるんじゃないのか？

「や、違つて。夢の相手の方が惚れてるんだつてよ」

「……？」

僕は思わず黙り込む。さよりは、小学校高学年の頃からモデルの仕事をしていた。ティーン向けのファッション雑誌の仕事が多いら

しい。最近では段々仕事も増えてきて、その分学校は休んだり早退することが多い。

同じクラスでも、会うこともあまりないし。まして、まともに話したこともない。

けど、斜め前の席で、あのほのかに香ってくる長い黒髪。時々僕の方を見て、ころころと笑う笑顔が印象的だ。僕の方を見て笑うのは、授業中の天然ボケキャラがおかしいからだろうけど。

あの笑顔は素直に可愛いな、とは思った。いつもよりリラックスしているようで……もしかしたら、僕だけに見せる特別な笑顔とか？ ばかばかしい。

「な、訳ないだろ」

危うく悟史に乘せられるところだった。

「だよな」

もうちよつと突っ込んでくるかと思ったら、あっさりと悟史も認めた。何だよ、その気にさせといていきなり落とすのか？ 僕はフーとため息をついた。ま、あのさよりが僕に気があるなんて、あり得ないよな。

跳ぶようにさよりが駆けてくる……。透き通るような真っ白いシヨールを羽織って。ああそうそう、白いレースのシヨールだ。この前は思い出せなかった。

天女の羽衣みたいだなあ……。白いワンピースが風になびく。

「……………」

僕に近づいて来たさよりは、じっと僕を見つめて何か言っている。なんだか僕はドキドキしてきた。やっぱり可愛いよな、さより……。思わず笑みがこぼれる。

君。清隆君。

ん？ 誰かが僕を呼んでいる。沢田みたいな野太い声じゃなくて、

高くて澄んだ綺麗な声だ。

「清隆君」

ビクンとして、僕は目を覚ました。え？ え？ ここどこ？ 規則正しく揺れる電車の音がする。あ、そうだ。帰りの電車の中だ。ヤバイ、また眠ってた。

「清隆君」

「はい？」

頭上で響く澄んだ声の方へ顔を上げ、僕は死ぬほどビククリした。「萩原さん！」

さよりだ。ついさっき夢で見ていたさよりが、現実にも目の前に立っている。

「気持ち良さそうに眠ってたね」

さよりは、屈託のない笑顔で僕を見下ろす。信じられない。何でここにさよりが？ じわじわっと僕の頬が熱くなるのを感じた。

「え、あの……どうしたの、萩原さん？……」

胸のドキドキを抑えて、僕はようやく彼女に聞いた。

「今仕事の帰り。今週は忙しくて、学校に行く時間もないの」

「そう……」

僕は、さよりの笑顔が眩しくて、おずおずと下を向いた。悟史にはタイプじゃないって言ったけど、やっぱりさよりは綺麗なな……。他の子とは違う。なんていうか、オーラがあるっていうか。

「清隆君は、ブラックとミルクどっちが好き？」

「えっ？」

突然のさよりの質問に、僕はドキリとして顔を上げる。彼女は、さっきと同じ穏やかな笑みを浮かべている。こんなにも近くでさよりの笑顔を独り占め出来るとは！ これ、正夢かな？ あの夢よりずっと良いじゃないか！

「チョココレートの話。ね、どっちが好き？」

「チョコ、チョココレート？……」

僕の胸が大きく脈打った。この時期、チョココレートって言えば…

…も、もしかしてバレンタインデーのチョコのこと？ え？ なんて僕に尋ねる？

「ぼ、僕はブラックがいいな」

頭の中かなりパニックっているが、必死で冷静な風をして答える。
ちよつと噛んだな。

「そ、ありがと。楽しみにしててね」

「えっ？……」

今何て？ それって、僕にチョコをくれるってことですよね？
ポカンと口を開けたまま、僕はしばらくさよりを見つめていた。

「じゃあね」

電車が駅に着き、さよりは天女の笑みをたたえたまま、軽く手を振り電車から降りていった。さよりの姿が見えなくなっても、僕は茫然としてさよりの消えた方向を見つめていた。

これは、夢じゃないよな。頬をつねってみたりする。

「現実だよな？」

小さな痛みを頬に感じたまま、僕の顔は自然にほころびてくる。

僕にもようやく春が来たか！ しかも、その相手があの萩原さよりだなんて！ ここが車内じゃなければ、飛び上がって叫びたい気持ちだった。

もうバレンタインが嫌いじゃない。

毎年、義理チョコしかもらえないバレンタインデーが大っ嫌いだった。けど、今年は違う。さよりからチョコをもらえるんだ！ しかも、本命チョコかも！

「フン、今年は悟史に自慢してやる」

バレンタインデーを間近に控えた休日の街を、僕は一人歩いていた。どこを見回してもラブラブなカップルだらけ。親友の悟史も今日は彼女とデートだ。なんでだか、あいつは昔からよくもてる。

いつもなら、一人で休日の街を歩いていると、惨めな気持ちになっ

てくる。ああ、でもこれで僕にもようやく彼女が出来るんだ。春を
思わせるようなうららかな日差しを浴びて、僕の心は弾んでくる。
昨夜もさよりの夢を見た。いつもと同じあの夢。さよりが何を言
っているのかは、聞こえなかったけれど。

「清隆君が・好・き」

って、言ってるような口の動きに思えた。そんな事を考えると、
自然に顔がにやついてくる。ああ、春だよなあ。いいなあ春って。
鼻歌でも歌いたい気分だ。

交差点の信号待ち。前を歩くカップルがイチャイチャしながら腕
を組んでいても、全然むかつかない。僕にはさよりがいるからな。

信号が青に変わり、人の波に押されるように歩き出す。晴れた空
の青空が眩しい。心地良い少し冷たい二月の風。目の前には白くそ
びえるビル。大きなビルの壁面には、何かのCMの映像が映し出さ
れていた。

その正面のビルを何気なく見ながら、横断歩道を半分近く渡った
時。

突然、CMの映像が変わった。晴れた緑の草原。白い服を身にま
とった少女が駆けてくる。ふわっと白いワンピースの裾が翻って…
…。

「えっ？」

僕は立ち止まり、食い入るようにその映像を見つめた。白い天女
の羽衣？ 黒い髪をなびかせ、駆けてくる一人の美少女？

「これって……」

度アップになった少女の顔。潤んだ瞳で僕を見つめる。

『ブラックとミルクどっちが好き？』

さよりの声は聞こえなかったけれど、画面に大きく文字が映し出
される。そして、バレンタインのチョコレートは 製菓……。

「……」

軽い目眩を覚え倒れそうになった。

「これだったのかっ……」

信号が変わり車のクラクションで我に返った僕は、慌てて横断歩道を走った。

バレンタインデイ。

久しぶりに学校に来たさよりに、僕はチョコレートもらった。

一枚一枚赤いリボンで飾られた 製菓の板チョコ。

「はい、清隆君はブラックね」

いつもと変わらない笑顔で、さよりは僕にブラックチョコを渡した。

「あ、どうも……」

僕は出来るだけ平静を装って、さよりからチョコを受け取る。さよりは袋の中からチョコを取り出し、もう次の奴に笑顔を向けていた。

「オー、清隆」

教室の隅で悟史がチョコを持って手を振る。彼奴はミルクチョコだった。

さよりは、女子も含めたクラスメイト全員に、 製菓のチョコを渡したのだ。そりゃ、自分が出てくるCMのチョコだもんね……。

僕はガツクリと肩を落とし、悟史の方に歩いていく。彼奴は彼女や他の女子からも本命チョコをもらっていた。

バレンタインデイなんか、大っ嫌いだーっ！ 心の中で絶叫する。

そう言えばさよりのあの夢。每晚続けて見た夢を、いつの間にか見なくなっていた。夢と現実の境界線が、はっきりと引かれたって訳かな？……。

了

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！

あらすじは去年から出来てたんですが、なかなか書く時間がありませんでした。ずっと保留にしましたが、書き始めたら一日で書けました。

他の皆さんの作品に比べてとっても軽いです。^^; 軽い気持ちで楽しんでいただけたらと思います。バレンタインが近いことあって、バレンタインもからめました。

ブラックチョコとミルクチョコどっちが好きですか？(^^)
私はどっちも好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4878b/>

夢と現実の境界線 春野天使編

2010年10月8日15時10分発行